【別紙 1】

令和５年度　江頭南遺跡発掘調査概要

1. 発見の経緯と調査の経過

江頭南（えがしらみなみ）遺跡は、令和元年度に日野川の河道中で不時発見された遺跡です。発見時、円筒埴輪 6 本が列を成すように河道中に露出していたことから、古墳の存在が明らかになりました。この付近に古墳が存在することはそれまで全く知られておらず、新規発見の遺跡です。

日野川では滋賀県により広域河川改修工事が計画・実施されており、工事の実施によって新規発見された古墳も破壊される恐れが生じました。そこで、関係諸機関との協議の結果、工事の実施に先立って発掘調査を実施し、記録保存することになりました。それを受けて、公益財団法人滋賀県文化財保護協会では、滋賀県からの依頼により、令和 4・5 年度にわたり発掘調査を実施しました。

2. 遺跡の位置と周辺の遺跡（図 1）

江頭南遺跡は日野川の河道内に位置します。日野川は鈴鹿山地に端を発し、日野町・東近江市・竜王町・近江八幡市を貫流し、琵琶湖へ流れ込む河川です。江頭南遺跡で見つかった古墳の位置は、現況では日野川の中洲にあたりますが、築造当初から川の中洲だったわけではなく、古墳時代は自然堤防上の微高地であったと考えられます。

周辺の古墳としては、江頭南遺跡南方の台地上には西車塚古墳（古墳時代中期）や東車塚古墳（古墳時代後期）があります。一方、江頭南遺跡から西方約 900ｍを隔てた日野川沿いの里井Ｂ遺跡では、過去の発掘調査において地表下約 3ｍで古墳が検出されています（古墳時代中期か）。

3. 今回の調査成果

(1) 古墳（図 2・写真 1・2）

令和元年度に埴輪が見つかった地点は、河道に沿って東西に長くのびた中洲状の「高まり」でした。この「高まり」付近に古墳が存在する可能性を考えて、今回は「高まり」付近を中心に調査を実施しました。その結果、判明したのは以下の 2 点です。

①「高まり」の内部も調査したところ、人為的に土を積み上げた痕跡を確認しました。

②「高まり」の中ほど付近で、埴輪列を確認しました。

以上から、この「高まり」は、中洲のように自然に形成されたのではなく、人為的に築かれた古墳の墳丘である可能性が高いと考えました。

①について―「高まり」は古墳の残存墳丘　残存する墳丘の内部を調査した結果、当時の地面を整地したうえに、細かい単位の盛土を行った後、大きめの単位で盛土を行ったことが分かりました。盛土に用いた土は粘土が多く、強固に仕上がっています（図４、写真⑤）。

さらに、残存墳丘の南側、現在の分流の川底を調査したところ、墳丘の裾が水流により浸食されて消失していることが分かりました。墳丘裾が消失しているため、正確な墳丘の高さは不明ですが、少なくとも墳丘の高さは 1.5ｍ以上に達したと考えます。

②について―埴輪列から墳丘形態を推定　令和元年度には今回の調査地の北側で円筒埴輪 6 本が列をなすように河道中から出土しています。そのうち 4 本は樹立した状態で出土しました。

今回の調査では、令和元年度発見時の南側から約 15ｍ隔てた付近において、円筒埴輪 13 本が列をなすように出土しました。この埴輪列付近は幅 1ｍ程度にわたり比較的平坦な面を成してい

ます。埴輪はその平坦面上で南西方向に倒れた状態で出土しました。
　今回の調査で確認できたのは墳丘のごく一部にとどまります。しかし、残存する墳丘と埴輪列の配置から、墳形(古墳の平面形状)を推定することができました。
　令和元年度発見時の埴輪列と令和５年度の埴輪列の配置をみると、両者は北東に向かって、「ハ」の字形をなして直線的に広がるように配置されていることが分かりました(図 2、写真⑦)。この配置状況は、前方後円墳の前方部の両側の埴輪列の配置に相当すると考えられます。
　以上から、見つかった古墳の墳形は前方後円墳である可能性が高いと考えました。ただ、残念ながら、後円部の大半は水流により流失してしまい、本来そこに存在したはずの埋葬施設については確認することができませんでした。さらに、前方部を含め古墳の裾部分のほぼすべてが水流で浸食されて遺存しないために、古墳の正確な規模を確定することもできませんでした。

(2)埴輪について
　令和元・4・5 年度に見つかった円筒埴輪は合計 22 本でした。本来はもっと多くの埴輪が配置されていたと考えられます。
　出土した埴輪は、いずれも土管状の円筒埴輪であり、今のところそれ以外の形象埴輪は確認できていません。見つかった円筒埴輪には、筒状の普通円筒埴輪と、大きく上部が開いた形状の朝顔形埴輪の二種類があります(朝顔形埴輪は令和元年度発見の埴輪列にも含まれていました)。
　通有の埴輪は、土師器などと同じく焼成温度が低く、赤っぽい色調です。一方、今回出土した埴輪は、灰色の色調を基調としており登り窯を用いて高温で焼成される須恵器と同様の特徴を有しており、出土した埴輪が須恵器窯で焼かれたことを物語っています。

(3) 古墳の築造時期について
　今回の調査では、埋葬施設については、主としてそれが造られることが多い、後円部が消失していることもあって、確認できませんでした。埋葬施設からは土器をはじめとした副葬品が出土することが多く、それによって古墳の造られた時期を明らかにできます。しかし、今回の調査では副葬品はないため、それ以外の要素である古墳の形態と埴輪の様相から時期を推定することになります。

古墳の形態から　墳丘北側で出土した令和元年の埴輪列の配置と、墳丘南側で出土した令和 4・5 年の埴輪列の配置から、残存墳丘は大きくハの字に開く前方部とみられます。前方後円墳は、出現時の古墳時代前期の段階では開き方が狭いのですが、古墳時代中期・後期と時期が経つにつれて開いていく傾向にあります。今回の調査では、埴輪列の配置から大きく開くことが考えられますので、古墳時代中期～後期ということが考えられます。
埴輪の様相から　出土した埴輪は、器面に残る特徴から須恵器窯で焼かれた埴輪ということが分かりました。埴輪は近隣で作られるものなので、近隣の須恵器窯で作られたと考えられます。国内の須恵器生産開始は、5 世紀前半以降ですが、県内ではその時期の須恵器窯はみつかっていません。江頭南遺跡から直線距離で南西約 3 ㎞には、竜王町から野洲市にかけて広がる鏡山古窯趾群があり、ここでは 6 世紀前半頃から操業が開始されます。江頭南遺跡の埴輪が鏡山で作られたかどうかは分かりませんが、可能性の一つとして挙げられます。
考えられる古墳の築造時期　上記のことから、大きく開く前方部が開くこと、須恵器窯で焼かれた埴輪が出土し、近隣の須恵器窯の操業が 6 世紀前半からであることから、現段階では古墳時代中期後半～後期、5 世紀後半頃～6 世紀前半頃と考えています。

(4)なぜ川の中から古墳が見つかったのか？(図 5)
　最も疑問に感じるのは、なぜ川の中に古墳があるのか？ということでしょう。
　滋賀県には、海のように大きい琵琶湖があり、琵琶湖には多くの河川が流れ込んでいます。現在の琵琶湖の水位は、南郷洗堰で制御され、基準水位は標高約 84.30m前後で維持されています

が、古墳時代にはそのようなものはなく、洪水を防ぐ堤防などもありませんので、琵琶湖の水位と流入河川の水位は、互いに影響し合っています。

川は山間地で谷を削り(浸食作用)、削られた土砂は下流へ運ばれ(運搬作用)、平野部では流れが緩やかになって川底に溜まっていきます(堆積作用)。琵琶湖の水位が低下すれば河口は前進して沖合で、上昇すれば河口は後退して内陸側で堆積していくことになります。昭和の後半から平成の初めにかけて行われた湖底遺跡の調査では、かつての琵琶湖の水位は現在よりも低くかったことが分かっており、古墳時代の琵琶湖の水位は現在よりも低く、湖岸線は今よりも沖合にあったことが、湖底遺跡の調査で明らかとなっています。琵琶湖の水位は時代を経るにつれ上昇傾向にあり、古墳時代よりも後の時代に内陸側で堆積が進み、江頭南遺跡は徐々に埋没していったと考えられます。

やがて、日野川の両岸には堤防が築かれます。堤防がいつの時代に築かれたのかは明らかではありません。川は堤防で固定されない限り、弱い地面を浸食しながら流れを変えていきます。人工的に堤防で固定されれば堤防内側を流れることとなり、上流から運搬されてきた土砂は堆積していき、堤防内側にある遺跡は埋没していくことになります。しかし、堆積作用ばかりが起こるわけではなく、近年の記録的な豪雨などにより、堆積した土砂は再び浸食され、さらに下流へと運ばれていきます。江頭南遺跡の古墳は、埋没していた古墳周辺の堆積土が流され、令和の時代にその姿を現したと考えられます。

4. まとめ

今回の調査から、以下の成果を得ることができました。

①出土した埴輪の器面には、窯で高温焼成される須恵器と同様の色調の部分がみられ、埴輪が須恵器窯で焼成されたことが明らかとなりました。

②令和元・4・5年度に出土した埴輪列の配置からみると、残存墳丘は、前方後円墳の前方部の一部と考えられます。

③墳丘は、粘土を用いて強固に盛土されており、墳丘の築造過程が明らかとなりました。

④墳丘は、後円部も含めて大半が消失しており、埋葬施設は残っておらず、墳丘の規模・周溝の有無も不明です。

⑤埋葬施設が消失しているため、古墳の時期を決めるのは難しいのですが、現段階では5世紀後半から6世紀前半頃と考えられます。

今回の調査では、あまり見ることができない前方後円墳の墳丘盛土の状況が確認でき、古墳の築造工程を知るうえで重要な資料となります。また、現況河川の中でこのような遺跡が発見されるということは、現在の地形や景観は、昔とは異なることを示すものであり、川や谷に埋没した遺跡、山地や丘陵地において浸食や削平によって消失した遺跡が存在することを物語っています。

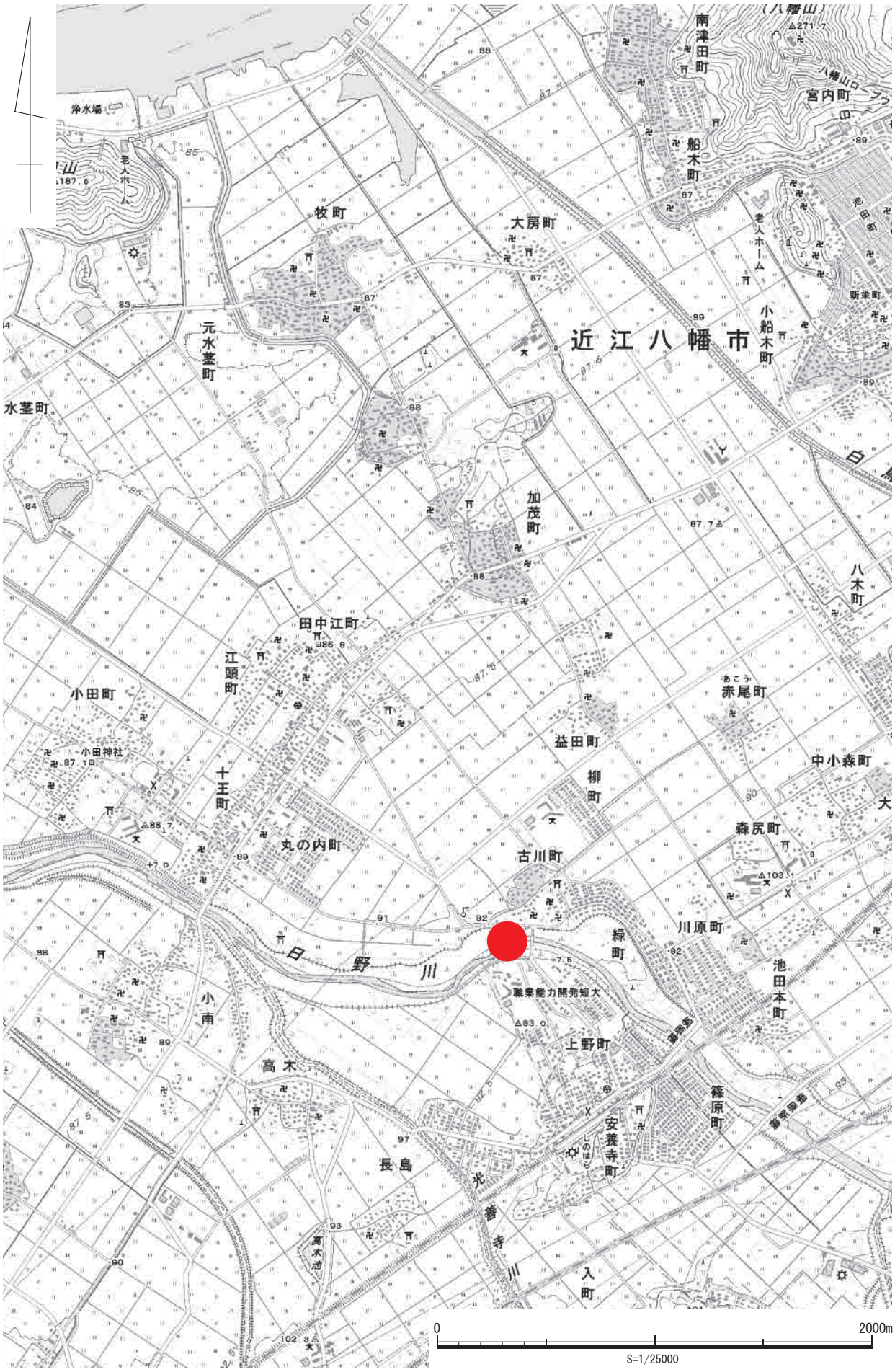

図１　江頭南遺跡　調査地位置図

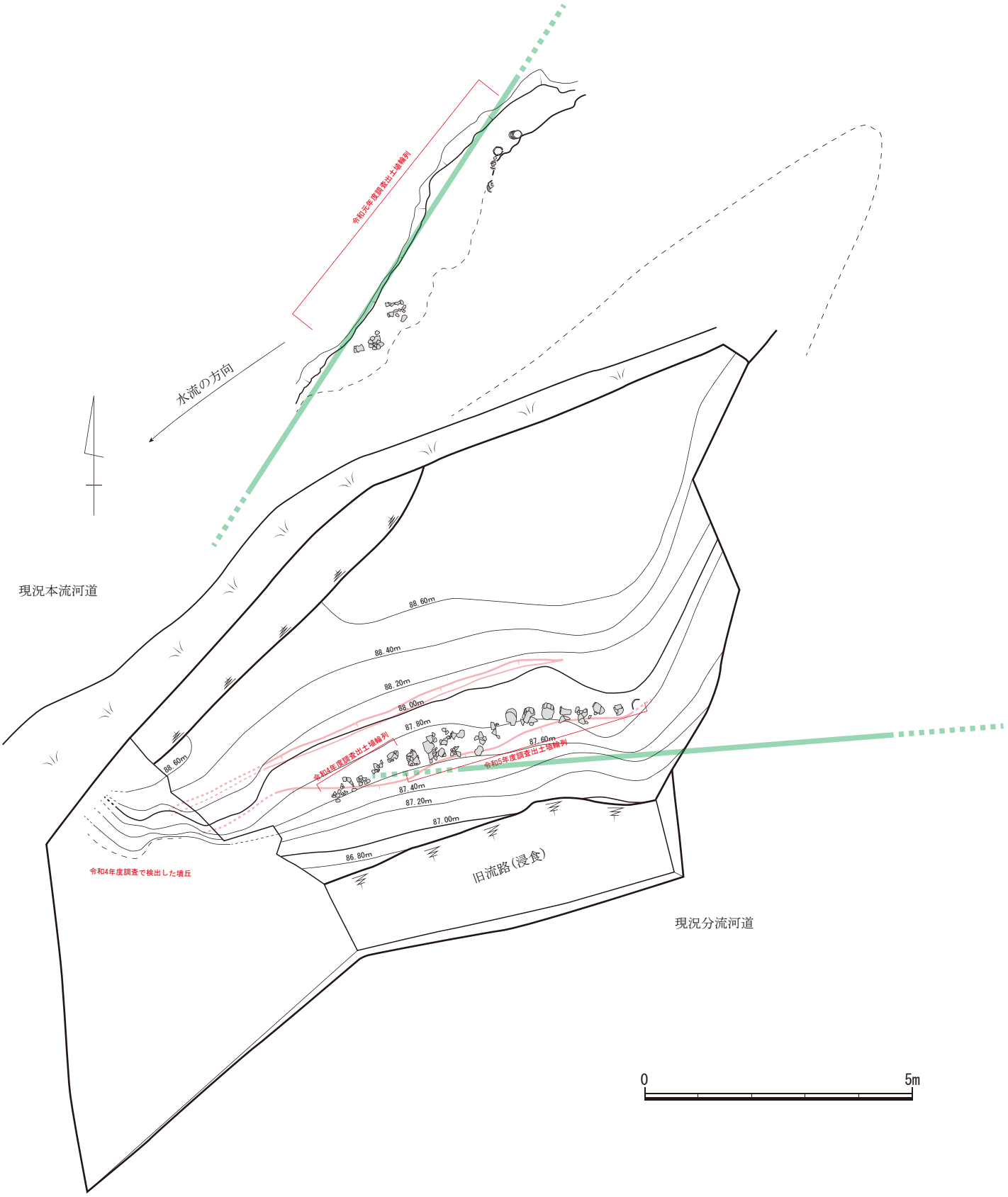

図2　江頭南遺跡　遺構平面図(S=1／100)

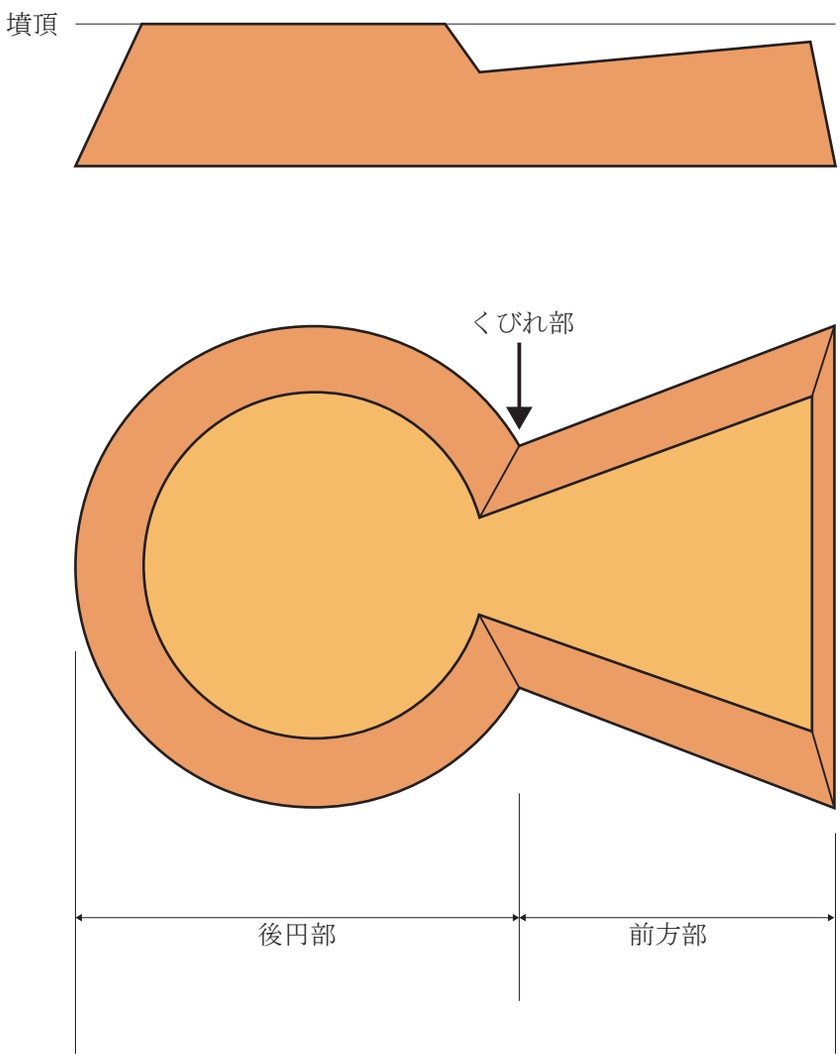

図３　古墳の各部名称（前方後円墳の場合）

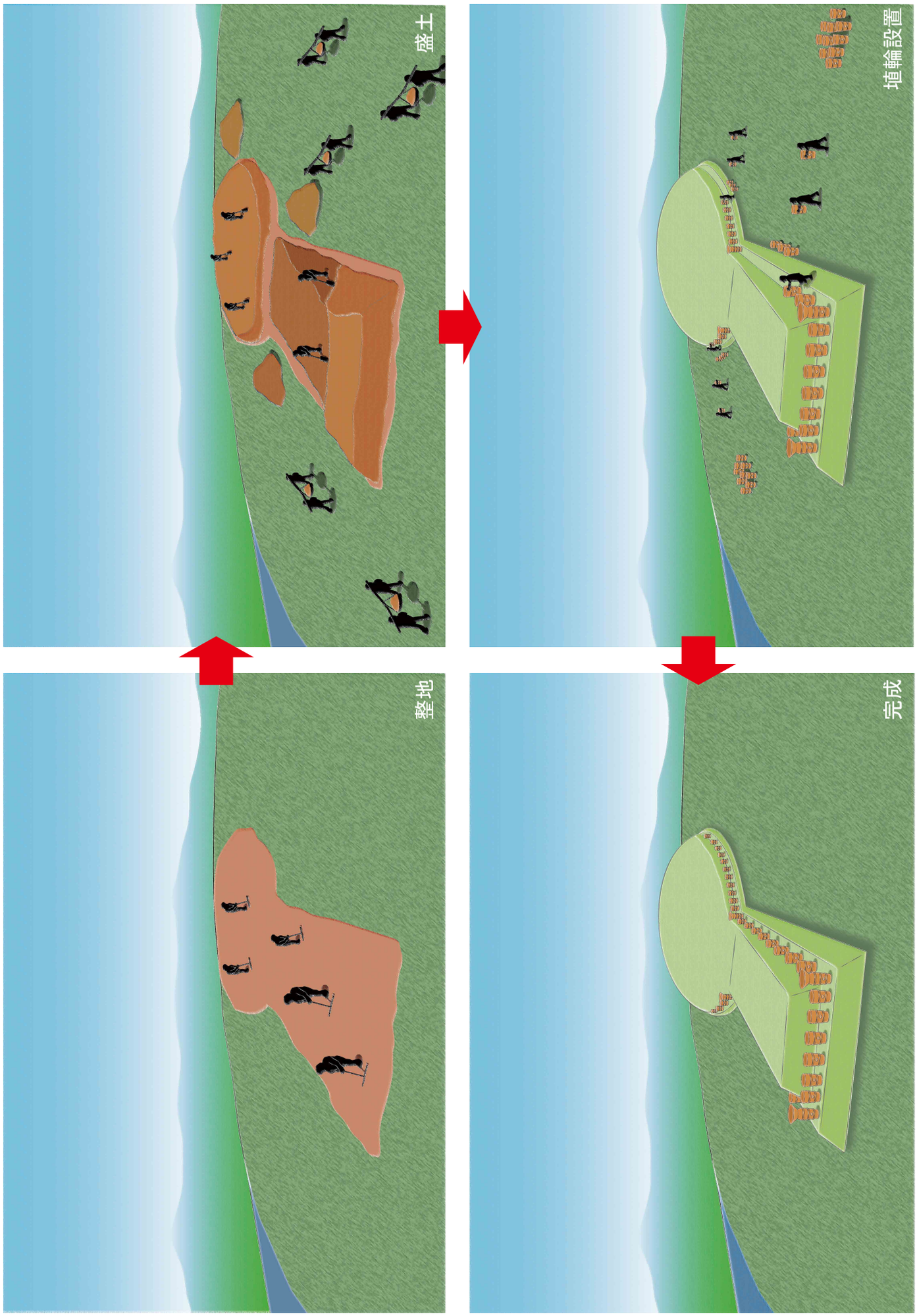

図 4　古墳築造工程想像復元図

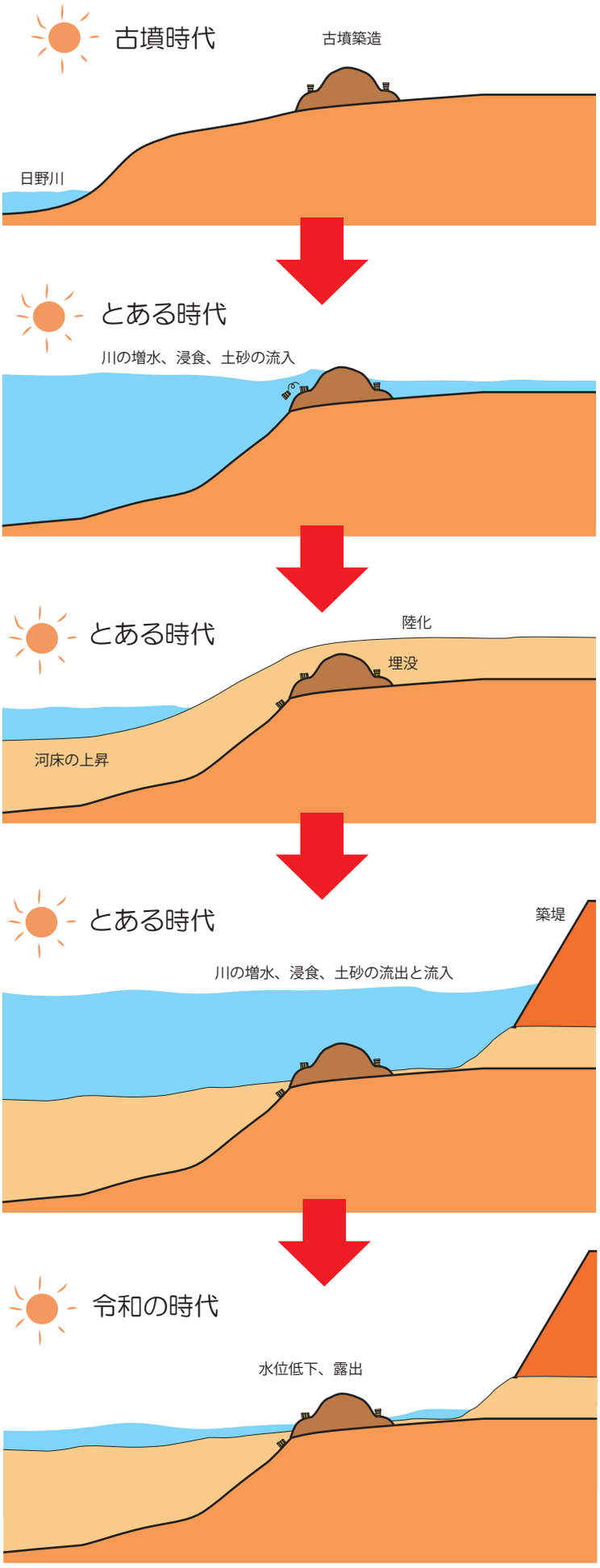

図 5　江頭南遺跡埋没過程想像復元図

① 古墳（西から）

② 古墳（南から）

③　埴輪列出土状況（東から）

④　埴輪列出土状況（西から）

⑤　丘土層断面（南から）

⑥　復元想像写真